

## 茨城県で発生したミズナのべと病について

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構  
中日本農業研究センター

やま うち のり ひと  
山 内 智 史

## はじめに

ミズナ(水菜)はアブラナ科ツケナ類ミズナ群に属し、その名称は古代の灌漑栽培に由来すると言われている(農研機構, 2006)。古くから京都で栽培されて京菜(キョウナ)や千筋京菜(センスジキョウナ)とも呼ばれ、鍋物や漬物用に利用されてきた(矢澤, 1994)。また、若い株の葉は柔らかくてサラダや浅漬け用にも供され、葉柄が赤紫に着色する品種は彩を添える食材として利用されることもある。

元々冷涼な気候を好む野菜だが、比較的耐暑性や耐寒性も備えており、茨城県では太平洋と霞ヶ浦に挟まれた鹿行地域を中心にビニルハウスなどの施設で周年的に栽培されている(林ら, 2019)。令和3年産の茨城県の生産量は19,200tで全国の約5割を超えており、2位の福岡県(3,000t)、3位の京都(2,000t)とは大きく水をあけている(農林水産省, 2022)。

2016年2月、茨城県にあるミズナ生産者のビニルハウス内で既知のものとは異なる症状を示す病害が発生し、病原は*Hyaloperonospora brassicae*と同定され、ミズナべと病と命名された(山内・吉田, 2022)。本稿ではミズナべと病の病徴と発生状況、病原の同定、アブラナ科野菜類に対する病原性などについて紹介し、今後、本病が他地域で発生した場合や本病菌により他の作物でべと病が発生した際の参考としたい。

## I 病徴と発生状況

ミズナは年間7~8作栽培されることもあり、春~初秋は本圃へ直播、生育の緩慢な晩秋~冬の低温期はセル育苗した苗を本圃へ定植する栽培が行われている(林ら, 2019)。2016年2月、茨城県で野菜類の育苗専用に使われていたビニルハウス内において、ミズナの子葉表面に、褐色、不整形のややくぼんだ病斑を形成し、病斑の裏面には白色粉状のカビを生じる病害が発生した(図-1A,

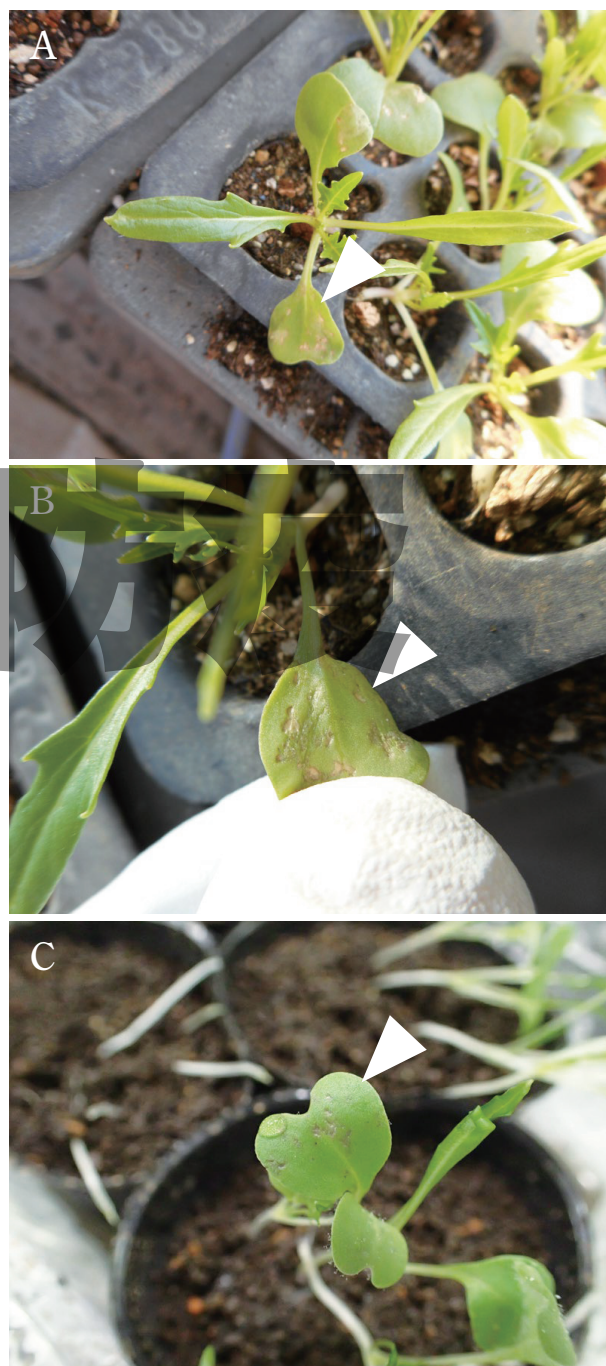


図-1 ミズナべと病の病徴

A: 子葉表面(自然発生), B: 子葉裏面(自然発生), C: ミズナ分離株の接種後に子葉上に形成された病斑, 分生子柄, 分生子, 矢印: 病斑部(山内・吉田, 2022より転載)。

Mizuna Downy Mildew Occurred in Ibaraki Prefecture. By Norihito YAMAUCHI

(キーワード: *Hyaloperonospora brassicae*, ミズナ, べと病)